

おたふくかぜ

強い感染力 重い合併症/ワクチン接種で予防を

今治市・丹こどもクリニック 丹 愛子

一年を通じて流行している感染症があります。それは「おたふくかぜ」です。正式な名称は「流行性耳下腺炎（ムンプス）」と言われ、両側または片側の耳下腺が腫脹（しゅちょう）して、「お多福」のような顔になるため、おたふくかぜと呼ばれています。

おたふくかぜは感染力が強いため、幼稚園や保育園で流行しやすい感染症です。学校保健安全法で第2種感染症に分類されているため、耳下腺・顎下腺・舌下腺の腫脹が発現した後5日を経過し、かつ全身症状が良好になるまで出席停止となります。

おたふくかぜはムンプスウイルスによる感染症で、のどや鼻から飛沫（ひまつ）感染し、気道粘膜で増殖した後、耳下腺や顎下腺の炎症を起こします。

またウイルスは全身に広がるため、無菌性髄膜炎（10%）や難聴（0.1%）、精巣炎（思春期以降では20～30%）、卵巣炎（思春期以降では7%）など重い合併症を起こすことがあります。

特に男性の不妊症の原因の一つと考えられており、予防が重要と考えられます。

おたふくかぜは特効薬がありませんが、予防するためのワクチンがあります。ムンプスウイルスを弱毒化した生ワクチンです。副作用として、接種後2、3週間後に発熱や耳下腺が腫脹することがありますが自然に治癒します。抗体獲得率は90%前後と言われています。

日本では1989年にMMR（はしか、おたふくかぜ、風疹の混合）ワクチンが定期接種化されましたが、93年に無菌性髄膜炎の合併症が高頻度（500～1000人に1人）という理由で中止となりました。しかし実際は自然感染による無菌性髄膜炎の頻度（10%）よりもはるかに頻度は低く、中止に反対する意見もありました。

おたふくかぜワクチンはその後、単独の任意接種（自費）となり、現在に至っています。単独ワクチンによる無菌性髄膜炎の副作用は2000～2500人に1人と低頻度にもかかわらず、一般社会のワクチンの認識不足のため接種率が低く、流行が続いています。

一方、世界保健機関（WHO）は、おたふくかぜワクチンの定期接種化を推奨しており、厚生労働省は2013年より定期接種化に向けて検討を行っていますが、実現に至っていません。

おたふくかぜワクチンは1歳から接種できます。日本小児科学会は、予防効果を確実にするため2回接種が必要であるとしています。1回目は1歳を過ぎたらMR（はしか、風疹の混合）に続いて、2回目は就学前のMRと同時期に接種することを推奨しています。

早めに予防接種を受け、子どもをおたふくかぜから守りましょう！

愛媛新聞「健康ファイル」

平成29年11月14日（火）掲載